

朝鮮羅南の追憶

千葉県 湯山豊治

はじめに

最近、テレビ、新聞などで清津という名は、工
作船や脱北者などでよくでてくるが、ほとんどの
人は羅南という町を知らない。それもそのはずで、
この羅南は大正初期までは北朝鮮の寒村に過ぎず、
まだ永住している日本人は少なかった時代でした。
その当時、咸鏡北道の政治の中枢は鏡城にあった
のです。日本は日露戦争の後、明治四十三（一九
一〇）年朝鮮を併合したが、一部の朝鮮人による
独立運動を抑えるためと、南満州の権益保護並び
にソ連の進出を防ぐ目的から、朝鮮に二個師団を
設置し、羅南には第十九師団司令部を置いた。ま
た、政治では道庁も羅南に定め、軍事、政治の兩
面から羅南を咸北の重要な町に変革したのである。
日本の軍隊が来てからは、羅南の町は朝鮮人部

落のほかに、日本人が経営する商店街がたくさん
できて、私たちは全く日本の内地にいるのと変わ
らない生活をする事ができた。

一 戦前の私たち家族の状況

私の父保十郎は、静岡県富士山麓小山町の農家
の三男として生まれ、実業学校を卒業してからは
実家の農業を手伝っていた。大正八（一九一九）
年徴兵検査に甲種合格するや、羅南の騎兵第二十
七連隊に入隊することになった。私の祖父は、働
き者の父を片腕のように頼りにしていたので、父
の入隊を非常に残念がったとのこと。

父が入隊後最初に経験した戦闘は、大正九年の
間島事件であった。この事件は、朝鮮独立運動を
していたバルチザンの首領、金日成が琿春にあっ
た日本領事館を襲撃した戦いであった。このとき
活躍したのが騎兵隊で、機動性を利用して三カ月
にわたりバルチザンの掃討に当たり、治安を回復
することができた。父は、このときの手柄により
勲章をもらった。終戦後、北朝鮮はこの戦いで日

本軍を撃破したと宣伝したが、これは全くの嘘である。

その後、父は大正十一年除隊することになったが、ときあたかも世界は軍備制限の時期であったので、今まで現役兵によってやっていた新馬の調教を、軍属である調教師によって行われることになった。父は早速これに志願して、最初の調教師として採用された。

父は、このころ同郷の母きみと結婚し、生駒町の陸軍官舎に住むことになった。家の回りは全部軍人軍属の家族ばかりで、生活には何の不安もなかった。外地では、ことのほか日本人同士の結束が堅く、相互扶助の精神でお互いに助け合って生活していた。特に親しかったのは、勝海さん、中沢さん、嶺川さん、坂巻さんで、引揚げ後も懇意に付き合っている。

昭和二（一九二七）年四月に長女登喜子、昭和七年三月次女喜子（感興で死亡）、昭和十年九月に次男隆之、昭和十三年八月三女浩子が生駒町の

官舎で生まれた。なぜか私だけは、両親の希望で昭和四年一月内地の父の実家で生まれた。昭和三年の十一月、冬の訪れの早い羅南を、まだ二歳にならない幼子の登喜子を連れてはるばる遠い内地に帰ったが、さぞ大変だったと思う。

母が、私を出産後羅南に帰ることになったが、このころには日本海定期航路があったので、父の実弟が付き添って敦賀まで来てくれて、母も助かったようです。しかし、冬の日本海は時化るのが常で、そのときも大荒れに荒れたそうです。父は清津港の埠頭まで迎えに出ていた。船が着いて客がタラップを降りて来たものの、どの客も船酔いで半病人のような姿であった。父は母がなかなか出てこないのが心配していると、最後に一人の婦人が赤子を背負い幼子の手を引き、信玄袋を持って降りて来た。よくもこんなに元気な女性がいるものだと感心して、よくよく見るとそれが母だったと一つ話に聞かされました。

この羅南の町は、軍都として日本がつくり上げ

ただけあって、ほとんどの人が何らかで軍隊に関係していた。我が家は、小作人として朝鮮人と満人を使って米を作っていた。また、軍に関係する借行社があり、いろんな品物を取り扱っていた。

官舎の近くに畑があり、農家育ちの父はほとんどの野菜を栽培していた。ただ消毒などは一切やらないので、キャベツはたくさん青虫がつくので、私も青虫取りを手伝った。

羅南から少し離れた所に独津という漁村があり、そこから朝鮮人のオモニー（おかみさん）が、大きな生きた毛蟹をたくさん頭に載せて売りに来ていた。それを母が釜で茹でて、私たちは腹いっぱい食べたものです。また、北朝鮮は松茸も採れて、これを炭火で焼き醤油をつけて食べるのが、最高の食べ方でした。

日本で犬を飼うのは、番犬または愛玩用であるが、朝鮮では食用に赤犬を飼っていた。何か祝いごとでもあると、これを絞め殺してお客に振舞っていた。私も一度朝鮮人の家庭に招待されて、こ

の犬の丸焼きを出されたが、テーブルの上に一匹丸ごと出されたときには、さすがに食べる気にはならなかった。

このほかに日本と違うのは、葬式のやり方だった。日本では遺族始め参列する人は黒の喪服を着るが、朝鮮では全白一色で遺体を担ぎ、「アイゴ一、アイゴ一」と泣きながら墓場まで葬列を作っていた。埋葬はほとんど土葬で、日本のように立派な墓標はなく、大きな土まんじゅうを作るだけであった。

羅南は北緯四十二度ぐらいに位置し、シベリアおろしの寒波は厳しく、氷点下十度を越えることさえあり、連隊の営門に立っていた歩哨が凍死するという事故もあった。

羅南では、室内の暖房はオンドル方式であった。オンドルとは、炊事場でご飯を釜で炊くと、その火焰がそのまま部屋の床下にある煙道を通って煙突に流れていく方式で、朝鮮特有の合理的省エネである。日本人の家庭では、これ以外にペーチカ

で暖房している家庭もあった。

そのころ、私たちにとって一番の楽しみは、軍旗祭に行くことであった。軍旗祭とは、連隊が天皇陛下から軍旗を拝受した日を記念するため、毎年催すイベントである。一般人は原則として連隊の兵舎内に立ち入ることができないが、この日だけは自由に入ることができた。連隊では、兵隊たちが演習や訓練の合間に準備に取り掛かり、それが兵隊の楽しみでもあったようです。第十九師団は芸達者な東北出身者が多く、いろいろと趣向を凝らしてお祭を盛り上げていた。特に興味をひいたのは、兵隊による田舎芝居と踊りであった。着物を着て女性に扮した兵隊が、舞台狭しとばかり踊ると、客席から「あら、あの女じゃないの」と声が掛かると、舞台から引き揚げるときに腰巻をめくって脛毛を見せて、客席の爆笑をかった。私が今でも一番印象に残っているのは、騎兵隊による乗馬の妙技であった。コサツク兵の服装をした兵隊が三十人ぐらい馬に乗り、裸馬の上に立つ

たり馬の腹の横に身を隠す妙技に、拍手を浴びていた。たまには落馬する者もいたが、馬は決して人を踏まないのには驚いた。軍旗祭のときには、軍旗は連隊本部前のテントの中に安置しているが、騎兵二十七連隊の軍旗だけは、房と棹だけしか残っていないかった。これは、満州事変の錦西の戦闘で敵弾に当たり、布地の部分が焼失したためだった。

父は生来親孝行で、独身時代から自分の給料の一部を実家に送金していた。また、田畑を所有し茂山に二千五百五十五坪の山林があり、生駒町に貸家もあったので、将来はこの地に永住することを考えていたのかもしれませんが。

二 私の学校生活

私は昭和十一年四月羅南公立小学校に入学し、生駒町の官舎から通学した。学校の校舎は煉瓦造りの二階建ての、当時としては立派な建物で、日本人だけの学校でした。校舎の横にはコンクリート造りの講堂があって、入学式や卒業式などの儀

式のほかに、映写会もここで行っていた。私の見た映画の中で、記憶に残っているのは尼港事件である。この事件は、アムール川河口の漁業地ニコラエフスクにいた、日本軍守備隊及び日本の居留民七百人余りを、ソ連の革命バルチサンが急襲して、大部分の邦人を殺害してしまった事件であった。日本は直ちに増援部隊を派遣して、バルチサンを討伐した事実を映画化したものであった。このとき、日本軍の兵士が邦人を探し回り、「日本人はいるか」と大声で叫んでいる場面を見て、私は思わず手に汗を握った。

昭和十二年一月、私たち一家は小学校の冬休みを利用して、初めて内地に帰った。そのとき乗船した船は、「さいべりや丸」でした。日本海はこのときも時化て、船の舳先の甲板は波をかぶり大揺れに揺れ、気分が悪く食事もできなかった。このほかに、日本海航路には「満州丸」「ハルピン丸」「気比丸」などが就航していたが、このうち「気比丸」は昭和十六年秋、清津から敦賀に向か

って航行中、城津沖でソ連の機雷に触れて沈没し、乗客百三十六人、船員二十人が死亡した。この船には、羅南から内地に帰るため乗船していた、同級生の小島徹君の家族が乗っていたが、運良く全員救助された。

このころになると軍備の進歩は著しく、従来の人馬を主にする戦争から戦車、火炮、自動車、航空機などの近代的兵器による装備になってきた。父の勤務していた騎兵第二十七連隊も搜索第十九連隊に改編され、乗馬の数は大幅に減少した。このため、調教師の多くは日本製鉄などへ転職して行ったが、父だけは上官の推薦により歩兵第七十六連隊に転属となり、将校の乗馬調教に当たることになった。これに伴い、私たち家族も東本町の陸軍官舎に移住し、私は昭和十六年四月、羅南公立中学校に進学した。この中学校は日本人の学校であったが、朝鮮人の裕福層の家庭の子弟も若干入っていた。

三 終戦までの状況

昭和十六年十二月八日朝、私が中学校へ登校するやベルが鳴って、全校生徒に校庭集合を命じられ、西東校長から「本日早朝、日本軍は西太平洋において米英両軍と戦闘状態に入ったが、戦争は軍人に任せ、諸君は従来通り勉学に励むように」との訓示があったが、私は何となく一抹の不安を抱かざるを得なかった。これがあの大東亜戦争であり、初戦は日本の大勝利で、私の中学二年までは何ごとも無く、平穩無事に勉強に専念することができた。

しかしながら、三年になると英語の授業が減り、軍事教練が増え、その上勤労奉仕に出ることが多かった。朝登校すると、校門に待っている日本製鉄(株)清津製鉄所のトラックに乗り、砂山にある工場に行き作業を開始した。作業は、溶鉱炉から流れ出てなまこ状になった銑鉄の塊を、離れた貨車まで運び積み込む単純な作業であった。この仕事はノルマ制で、学年ごとに作業が終了すれば帰るので、皆夢中になってやったものである。おや

つに海草パンが一人一個宛もらえるので、食糧不足の折、私たちが盛り盛りの者には唯一の楽しみであった。この作業が終わると、直ちにトラックで戻り教室で授業を受けたが、大部分の生徒は疲れのため居眠りする状態であった。そのほかには、陸軍倉庫で麻袋に入った米をトロッコに乗せて、所定の倉庫に積み上げる作業であった。特別ノルマはないので、中には倉庫内で昼寝をしたり、生米を袋から抜き取って食べたりする者もいた。

しかし戦局は日増しに悪化し、米軍は昭和十九年六月サイパン島に上陸し、七月七日南雲中将の率いる日本軍は玉砕した。この陥落によって、サイパンを基地にしたB29爆撃機により日本本土は爆撃され、焦土と化していった。このころ、私たちの同級生からも甲種予科練を志願して学園を去る者が続出するようになり、私たちは予科練志望者を羅南駅頭で見送ることが多くなった。

昭和十九年秋、学校制度の改革により、私たちは四年生は昭和二十年三月、繰上げ卒業することが

決まった。

一方、昭和十九年十月レイテ沖海戦が始まり、神風特攻隊が編成され、レイテ沖にいる米軍の艦船に突入していた。かくのごとき南方戦線の急迫により、朝鮮第十九師団にもルソン島への出動が下命され、昭和十九年十二月初旬家族に行く先を告げず、極秘裏にルソン島に出動したのであった。私の義兄上杉清吾は、歩兵第七十六連隊本部付としてこれに加わっていたが、昭和二十年七月十七日マンカヤンにおいて、壮烈な戦死を遂げた。

私の父はこのルソン島出動には参加せず、留守部隊である歩兵第二百九十一連隊の所属になって、羅南に残ったのである。

私たち羅中の四年生のうち内地進学を志望する者は、昭和二十年一月第二志望まで校名を書いて提出し、京城（ソウル）で受験した。当時、内地は米空軍による本土爆撃が熾烈で、日本海及び対馬海峡には敵の潜水艦が遊弋^{あそぶ}して、受験できる状況ではなかった。私には、関東学院航空専門

学校（現関東学院）の合格通知がきたが、自分の志望校でなかったので進学を断念した。将来は陸軍経理学校に行くつもりだったので、陸軍貨物廠に一時就職をした。そこで、中学の先輩の大山氏と事務引継ぎをした。彼は、朝鮮出身者であったが非常に優秀で、徴兵で陸軍に入隊することが決まっていた。彼は私たちの知らない情報を知っていて、日本がただならぬ状況にあることを私に教えてくれた。私の仕事は軍隊の糧食の調達で、毎日のようにトラックに乗って清津に行った。清津には林兼の缶詰工場があって、そこで鰯の缶詰を製造していた。また、製油所では鰯から食用油を作っていた。私から少し遅れて、同期生の会田芳太郎君（故人）も入所して来た。彼とは、羅南を脱出するときは別行動であった。

昭和二十年五月、独ソ戦でドイツが連合国に無条件降伏すると、ソ連は日本に対し昭和二十一年四月まで有効の日ソ中立条約の延期はしない旨通告し、シベリア鉄道で正規軍を極東方面に移動し

始めた。この情勢を知った日本は、ソ連軍の侵攻に供えるべく羅南師管区を関東軍の隷下に置き、兵力を鮮満国境守備のため移動させることとなった。

父の所属する歩兵第二百九十一連隊（連隊長杉山大佐）は七月羅南を出発、富寧、古茂山、会寧行営、北倉坪に宿泊し、八月二日に慶源守備隊に合流した。父も軍属として連隊と行動を共にした。ここでは、豆満江に相対し陣地構築援助に当たった。ときあたかも炎熱の折、加えて降雨のため道路状況は悪く、病馬が続出し、この治療にわずかな人員で忙殺されたとのことだ。

八月七日未明、ソ連軍が急に慶興の国際橋を占拠したとの報に接して緊張は高まり、引き続きソ連軍が一斉にソ満国境に進出中との情報が、頻々として報ぜられてきた。八月九日未明には、ソ連機は編隊を作って羅津港を次々と爆撃し、また満州の琿春も爆撃されて火災に包まれ、その黒煙は天を焦がす有様で流れてきた。

会寧の歩兵第七十五連隊は、武器庫、糧秣庫及び兵舎陸軍官舎は火災で焼け落ちてしまい、朝鮮人たちが焼け残った食糧や被服を牛車やオモニーが頭の上に乗せて、夢中で運んでいた。

私は、自宅から毎日陸軍貨物廠に通勤していたが、八月十三日ソ連軍の侵攻を知らされ、貨物廠も軍の命令で山間の白岩に向かうことになった。支廠長は、私に「君は未成年で兵役もないので、家族のもとに帰ってもよい」と言われた。私としては、貨物廠と行動を共にする決心をしていたので、荷物を取りに自宅に戻ったら母、姉、妹が軍の命令により緊急避難するため、貴重品、食糧、衣類をリュックサックに詰め込んでいる最中でした。そこで、私は急いで自分の荷物だけ持ち、家を後にした。貨物廠は軍の主要糧食を調達保管する倉庫なので、非常用の乾パンなど携帯食がまだたくさん残っていた。私たちはそれをトラックにいっぱい積み込み、男性は徒歩で白岩を目指して出発し、清羅街道に出てみて驚いた。街道にはあふ

れんばかりの人が歩き、中にはリュックサックを背負った母親が、泣き叫ぶ幼子を叱咤しながら引きずるように手を引いていて、まさに阿鼻叫喚の様相であった。

このころ清津一带はソ連軍の艦砲射撃を受けており、これに加えて空襲があり修羅場と化していた。私と毎年羅北会の旅行で一緒になる宮前睦子さん（当時五歳）は、お母さんと弟がこの艦砲射撃で即死した。たまたま睦子さんだけはその場になかったため助かり、泣いているところを日本兵に発見され、威興まで連れて来てもらったものの、その兵隊も幼子連れの行動はできないので、たまたま羅南高女の彦坂さんに会い睦子さんを託したのであった。彦坂さんは見ず知らずの睦子さんを預かり、避難生活をしながら新潟の実家まで送り届けたのである。

私は軍装して出発したが、避難で歩いている子供連れ女性から「頑張って下さい」と悲壮な声で励まされ、奮い立った。しかし、進むにつれて道

は狭くなり、遂にトラックは通れなくなってしまい、止むを得ず各人が持てるだけの荷物を分担して持って、行軍を続けた。

しばらくして羅南の方角を見ると、夜空は真っ赤になって燃えている様子が分かった。これは、ソ連機の空襲と日本軍が、兵舎に火を放ったためであった。その夜は朝鮮人の農家の家の倉庫に宿泊したが、食糧は手持ちの携行食糧で間に合わせた。翌日、ソ連機が頭上を低空で飛んできたので急いで林の中に逃げたが、機銃掃射は受けなかった。

やっと白茂線にたどり着き、延社から有蓋貨車に乗り、男性は全員貨車の屋根の上に登ったが、速度は出ていないので危険はなかったものの、トンネルに入ると煤で真っ黒になってしまい、閉口した。

八月十七日恵山鎮に着いて、始めて思いもよらぬ日本の敗戦を知り、呆然となった。既に、要所には自動小銃（通称マンドリン）を持ったソ連兵

がたむろしており、びっくりした。私たち貨物廠の男性も、ここで武装解除を受けることになったが、持田支廠長は私をちようど恵山鎮に来ていた家族のもとに帰してくれた。もしこのとき、家族のもとに帰らなかつたら、多分シベリア抑留の身になっていたことだろう。それを思うと、支廠長に感謝せざるを得ない。

恵山鎮で家族と一緒にになり、私は軍人家族と白岩に移動し、ここで朝鮮人に変装して、私たちを探していた父と奇跡的に会うことができ、お互いに手を取り合って喜んだのである。

四 悲惨な避難行動

しかし喜んだのは東の間で、八月二十八日、この日からは威興に向けての徒歩行動になってしまった。大人の男性は父と私くらいで、残りは婦女子のみだったため急ぎの行動は不可能で、実に大変だった。何しろ食糧の手持ちはほとんど無く、山野の草を主食とせざるを得なくなり、「たんぼぼ」はすべて食べたが、アク抜きをしないので苦

くて食べるのに苦労した。飲み水は川や田んぼの水を使用した、「ぼうふら」がたくさんいるので、必ず煮沸することにした。

雨の夜は松林で一夜を明かし、寒い夜はロウソク片手に古木を集めて燃やして暖をとり、草を集めて着の身着のまま寝るが、朝起きると着ていた衣類は夜露に濡れてびしょりになっていた。歩き疲れて、途中海岸に出て舟に乗ったが、舟が沖合いに出ても一向に進まないでおかしいと思つたら、これは料金だけを搾取する目的の闇船で、騙されたことを悔やみながら人影のない陸地に降りてもらった。つらい長い行軍なので皆疲れており、幼子が死亡すると穴を掘って埋めたり、水葬にしたりした。また、河川には橋がないので、転がっている樹木を渡して、父は丸木橋を作り、幼子の手を引いて渡すことは数知れなかった。また、父は歩けなくなった三女の浩子（七歳）を自分のリュックサックの上に載せて、山坂を歩いた。私の家族の中で、次女の喜子だけは歯を食いしば

って愚痴一つ言わず、頑張っていたのを思い出す。途中の死亡者は幼子十一人であった。

長い行軍をして、ようやく咸興に着いたのは九月十四日で、実に十四日間の野宿生活で、咸興に着けば何とかなると希望を抱いての、つらい長旅であった。しかしながら咸興に着いたものの、日本人の家屋は全て接収されていて、私たちの入居できる住宅はなく、立ち上がる元気もうせてしまった。そこで日本人世話を立ち上げ、朝鮮当局と交渉して、倉庫や接収した日本人家屋に分散して居住できるようになった。私たち家族も二階建ての住宅に四世帯入居し、何とか雨露だけは凌ぐことができるようになった。

しかし、日を経るに従い食糧は不足し困ってきたので、今度は働き易いように大きな倉庫に移り、ここで父と私は世話人会の斡旋でソ連軍の使役をやった。仕事は駐屯所の掃除で、帰りに食事の残飯をもらうだけであったが、それでもしばらくは助かった。さらにちょうど稲刈りシーズンだった

ので、父と私は裕福な朝鮮人の農家に手伝いに行ったが、食事は白米でデザートとして餅菓子も出された、久しぶりにお腹いっぱい食事をする事ができた。その主人の弟の姜さんは、小学校の教頭をしていた親日家で、「日本は今度の戦争で不幸にして敗れたが、朝鮮と日本は昔から兄弟国として仲良くやってきた仲である。日本人には知恵があるので、いつかは必ず立ち上がるはずであり、それを私は期待している。あなたたちも、決して悲観することなく頑張って下さい」という主旨のことを話して、励ましてくれました。私はこれ聞いて、日本が敗れても朝鮮にこういう人がいるのかと、胸が熱くなりました。父と私が働いたので食糧は何とか手に入るようになった。一番困ったのは、たちの悪いソ連兵が若い女性と見れば連れ去ることだった。仕方なく夜は男性が交代で不寝番を決め、倉庫の入り口で番をしていても、ソ連兵が自動小銃で脅して闖入ちんにゅうして来る始末で、やっとな保安隊を通してソ連軍の憲兵に連絡してか

ら、それは無くなった。

十一月に入ると、食糧不足と衛生施設の不備から栄養失調者や発疹チフス患者が続出して、亡くなる者が多くなった。また、寒さも加わって倉庫内でも零下十度を下回ることが多くなり、綿の代わりに藁を入れた速成の布団を作ったが、十分な保温にはならず眠れなくて起き上がり、皆で炭火を囲んで夜明けを待つことさえあった。死亡者は十二月上旬、多い日には十数人になることがあった。日本人世話会も遺体の処理に困り、男子の健常者を動員して、街から離れた三角山に大きな穴を掘り、その中に菰に包んだ遺体を荒縄で縛り、遺体を埋めるようにした。生活を支えるために、姉と妹も各々朝鮮人の家庭に住み込み、女中として働き始めたが、妹喜子は真冬の最中に頭を洗わされて風邪をひき、そのまま寝込んでしまい発疹チフスと敗血症を併発したため、昭和二十一年三月二十二日、不帰の人となった。亡くなる当日、父と私はソ連軍の仕事に出ていて、夕方六時ごろ

帰宅して門をくぐると、母が待っていたように妹の病床に呼び寄せたが、瞳孔が開いていて声を掛けても既に返事は無かった。妹の遺体は菰に包まれ、世話人の男性に担がれて三角山の山中に埋められ、母が遺髪だけ持ち帰った。

威興地区では約七千八百人の日本人が亡くなり、私たちが羅南で親戚以上の付き合いをしていた坂巻さんご夫妻及び父と兄弟の約束さえ結んだ勝海さんの小父さんも、この中に含まれている。心からご冥福をお祈り申し上げます。世話会は、多くの日本人が相次いで亡くなり、このまま推移すればさらに死者が増加するのみなので、朝鮮当局に交渉して日本人の避難民を南下させることにし、まず第一陣が二月上旬威興を出発し、次々とまとまった人数で貨物列車に分乗して、この地区を離れて行った。私たちの家庭は、父が県人会の仕事をしていた関係で、少し遅れて五月二十四日有蓋貨車に乗って威興を出発した。食事やトイレなどの都合でときどき停車しながら、三十八度線に向

かった。

しかし、三十八度線の下前の駅で全員降ろされて、保安隊の荷物検査を受けたあと、ここからは全員歩くことになってしまった。そして険しい金剛山を迂回しながら、目立たないようにするため極力日中の行軍は避け、日没を待つてようやく三十八度線を越えることができた。すると、今度は米軍のジープが待っていて、注文津まで誘導してくれ、ほっとした。今までソ連軍による残忍な取り扱いを受けた我々にとって、この米軍の人道的な扱いに心から感謝した。注文津は南朝鮮の漁村で、砂浜には米軍のテントがたくさん張られていて、避難民はその中に収容され分宿していた。食糧は、ほとんど米軍から給与され大助かりだった。ただ、本土へ移送する米軍の大型舟艇は数が限られていたので、二週間テント生活を余儀なくさせられた。

私たちの舟艇は六月十四日注文津を出航し、翌十五日山口県の仙崎に投錨したが、ここで船内に

伝染病が発生したので、檢疫のため上陸するのに十日余り要して、六月三十日久しく待ち望んでいた日本本土の土を踏んだ。この喜びは、筆舌に尽くし難いものであった。上陸後、引揚者登録の手続があり、七月二日父母の故郷に裸一貫の身でたどり着いたのであった。

おわりに

平成十八(二〇〇六)年十一月六日、朝鮮羅南公立中学の同窓会が、東京有楽町の外人記者クラブで開かれた。そのとき、先輩で韓国出身の伊氏が、いみじくも挨拶で語られた言葉が印象的であった。その内容は、今韓日の間には領土問題など懸案事項を抱えているが、それとは関係なく韓国人の大半は今でも日本が好きで、同じ東洋人として仲良くしていきたいと思っている、という主旨の話であった。これについては私も全く同感で、確かに日本は朝鮮に対して皇民政策をとり、無理に創氏改名させたり、徴兵令をとったりして反感をかかったが、西洋諸国のように戦争により植民地

化したわけではなく、一視同仁の精神で仲良くする
のが本意であった。避難中、咸興で出会った姜
氏も同じ気持ちだったと思う。

興南窒素の野口導氏は、私財を投じてまで水豊
ダムや赴戦江ダムの建設に尽力したのも、その精
神に基づいている。また、台湾で八田与一氏が台
湾の農業発展に私財を投じているが、台湾ではこ
れに感謝して銅像を建てている。

これから戦争は絶対してはならないし、日本自
ら戦争を仕掛けることはない。私としては、一日
も早く拉致問題を解決して、北朝鮮と平和の礎を
築くことを念願して止まない次第である。

父と母に支えられて

東京都 小野 裕 子

一 私の幼少時代

明治四十三（一九一〇）年、日本は京城（ソウ
ル）に朝鮮総督府を置いた。私の父は大正十五（一
九二六）年ごろに、総督府に所属する警察官とし
て生きる道を決めたようだ。

朝鮮忠清南道公州が、父の最初の出发点となっ
た町である。家族は、その父に従ってひたすらあ
とを追って歩いた。当時、北方の大陸には満州国
という大きな国が造られようとしていた。満州と
朝鮮との境に流れる大河のうち、東に流れる河を
「豆満江」と言った。西の方へ流れる河を「鴨緑
江」と言った。その中央に「白頭山」がそびえて
いる。

若かった父は、世界の大きな動きの中でどこに
誘われたものか、今となっては本人の真意を知る